

有斐閣選書

短歌読本

旅

日本人の旅と歌 岡野弘彦

万葉の旅 佐佐木幸綱

女性と旅 生方たつゑ

西行の旅 水野昌雄

現代の旅と歌 杜沢光一郎

牧水の旅と歌 大悟法利雄

外国の旅と歌 鈴木英夫

旅のこころ、歌のこころ 加藤克巳

加藤克巳 編

日本文學
編

讀本 旅



有斐閣
選書

編者紹介

かとうかつみ
加藤克巳

大正4年京都府生れ。昭和13年国学院大学国文科卒業。歌誌「個性」主宰，現代歌人協会理事。歌集『螺旋階段』『エスプリの花』『宇宙塵』『球体』（逎空賞受賞）『心庭晩夏』『万象ゆれて』など，評論集『意志と美』『邂逅の美学』ほか。

短歌読本 旅

〈有斐閣選書〉

昭和55年11月10日 初版第1刷印刷

昭和55年11月20日 初版第1刷発行

定価 1,400 円。



編 者 加 藤 克 巳

発 行 者 え ぐさ ただ あつ
江 草 忠 允

発 行 所 株式会社 有 斐 閣

東京都千代田区神田神保町2-17
電 話 東 京 (264) 1 3 1 1 (大代表)
郵便番号 [101] 振替口座東京 6-370 番
本郷支店 [113] 文京区東京大学正門前
京都支店 [606] 左京区田中門前町44

印刷 藤本綜合印刷・製本 高陽堂

© 1980, 加藤克巳. Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

1392-082700-8611

はじめに

誰しもが、心のどこかに、小さな旅でもいいから、どこかへ行ってみたい、できれば遠いところへ行ってみたい、という気持を持っているのではないか。そしてそれがあんがいたやすく実現され、一泊、二泊の旅から、海外旅行まで、しかも若い人たちに限ったことではない、相当な年配の人たちもせっせと旅に出掛ける。いろいろな事情があつて、そうたやすく旅行のできない人でも、多くは心中で旅にあこがれているにちがいない。

なぜ、こんなにこのように生活のなかに旅が入りこんで来たのであろうか。生活が豊かになった、時間に余裕ができてきた、観光事業が発達してきた、などの理由もあるが、時代が、つまり物質文明の極度な発達をみた文化爛熟の、今日という時代が、いつしかこのように旅を恋わしめるのかもしれない。めまぐるしい日常を離れて、自然をもとめ、名所古蹟をたずね、ひととき心洗われ、現実を忘れて遠い昔に心遊ばせる。

ところで旅は、遙かな祖先の時代にも、生活の一部、というより大きな部分を占めていた。ちょっと移動するにも、今のように交通機関がなかったのだから、すべて旅であつた。そして、時代が経つて中世に至り、漂泊の思いおさえがたく、野を山をさすらい、生涯を旅から旅にあけくれた人たちもあつた。旅の歴史、旅の心は古今多くの歌に遺された。

旅は夥しい名歌を生み続けてきた。

そこで、このたび、それらを「旅と歌」という共通主題として、昔から今日までにわたり、八名によって共同執筆したのが、この書である。

もう少し言うなら、日本人の旅と歌、万葉の旅、女性の旅、西行の旅、現代の旅と歌、牧水の旅と歌、外国の旅と歌、そして、旅のこころ歌のこころ、というテーマを夫々たてて、お互いに自由な語り口で書いた。したがって抄出歌に重複があつたり、同じような旅への考え方を述べたところもある。それだけ各自、他にとられず思うところを自由に述べ、語ったということになる。読者は、これらをあわせ読んでくださることにより、「旅と歌」が昔から今に、人生にとって、人間の生活にとってどんな意味を持ったか、あるいはいまも持つかをいっしょになって考えていただければ嬉しいことだし、そういうむずかしいこともさることながら、古代から現代までの旅と旅の歌をよく味わってもらい、これをきっかけに、さらに旅に心ひかれ、自らのよき旅を満喫していただければいっそう嬉しいことである。

旅に心を洗い、旅により心を清やかに、豊かにする。そこからまた活々とした生活がよみがえり、明るい明日が展げてゆくようありたいものと願い、編者のことばとする。

昭和五五年九月

加藤 克 巳

第一章 日本人の旅と歌

岡野弘彦へ1



1	旅の原型		(2)
2	行路病者と道の神		(8)
3	海の旅と歌		(14)
4	旅の相聞歌		(21)
5	旅の夜の鎮魂歌		(24)
6	旅の歌と歌枕		(27)

第二章 万葉の旅

佐佐木幸綱へ33

1	どんな旅であつたか		(34)
---	-----------	-------	------



第三章 女性と旅

生方たつゑ(61)

2	官人の旅……………	(38)
3	人麻呂の旅……………	(43)
4	黒人の旅……………	(49)
5	虫麻呂、赤人の旅……………	(52)
6	遣新羅使人歌……………	(56)
7	防人歌……………	(59)
1	額田王……………	(62)
2	弟橘媛……………	(65)
3	大伯皇女……………	(67)
4	和泉式部——恋の旅路……………	(72)
5	阿仏尼——誇りをえるための旅……………	(74)
6	与謝野晶子——一人の旅……………	(77)

第四章 西行の旅

水野 昌雄〈91〉

7	今井邦子……………	(78)
8	岡本かの子……………	(79)
9	現代短歌——特に投稿歌の旅……………	(81)
10	自歌自注——ふるさと慕愁……………	(83)
11	推敲例歌——月白く……………	(85)
1	中世の旅とところ……………	(92)
2	西行の旅とところ……………	(96)
3	西行の旅をたどって……………	(102)
4	西行の旅の周辺……………	(109)
5	現代短歌と西行……………	(118)

第五章 現代の旅と歌

杜 沢 光 一 郎 〈123〉

- 1 旅は「名歌」を生む……………(124)
- 2 「旅」は変質した……………(126)
- 3 現代の旅のすがた……………(130)
- 4 現代の旅の歌にみる様々な心……………(133)
- 5 安易な旅行詠の氾濫を防ぐために……………(153)
- 6 旅の歌の新しい展開のために……………(159)

第六章 牧水の旅と歌

大 悟 法 利 雄 〈163〉

- 1 青春時代の旅……………(164)
- 2 結婚後の旅……………(173)
- 3 牧水の旅あれこれ……………(176)
- 4 牧水の旅の歌と現代の歌……………(187)

第七章 外国の旅と歌

鈴木英夫〈193〉



1	はじめに……………	194
2	古代の海外の旅……………	196
3	古代の外地詠……………	199
4	近代の外地詠……………	204
5	茂吉と白秋……………	206
6	現代の外地詠……………	210
7	歴史、文化、風土……………	215
8	外地詠の課題……………	219

第八章 旅のこころ、歌のこころ

加藤克巳〈223〉

1	旅とは……………	224
2	旅のこころ……………	229

3	旅のころ、歌のころ……………	(236)
4	旅の歌……………	(237)
5	続 旅のころ、歌のころ……………	(243)
6	旅をたのしみ、素直に旅の歌を……………	(249)

地名のしおり（石本隆一）

象潟 （きやうかた）	九十九里 （くじゅうくり）
柳河 （やなぎがわ）	十二橋 （じふにきやう）
(222)	(252)

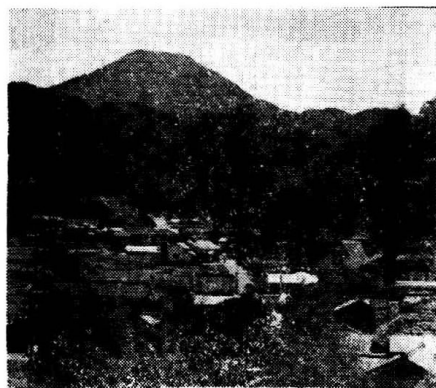
☆ 執筆者紹介（巻末）

◎ 写真・資料提供

斎藤 茂太	静岡県東京観光案内事務所
若山 旅人	スイス政府観光局
*	富山県東京事務所経済課
愛知県観光協会東京案内所	奈良県東京観光物産あつ旋所
イタリヤ政府観光局	日本空港公団広報課
岡山県庁知事室公聴広報課	弘川寺 本坊
京都府峰山町役場	福島県観光連盟東京案内所
群馬県東京物産観光事務所	宮城県東京商工観光事務所
高知県東京物産観光事務所	和歌山県教育庁文化財課
滋賀県東京物産観光あつ旋所	和歌山県東京事務所物産観光部

第一章 日本人の旅と歌

岡野弘彦



比治の山里（現在の磯砂山＝右手前木立のなかに「天女の衣」を保存する家がある）

1 旅の原型

旅と文学とが密接なからまりあいを持つのは、どこの国の文学にも共通した現象にちがいない。だが、日本文学における旅の要素の重要さは、ヨーロッパ諸国のそれと比べて格別のものであるように思われる。それもただ古代だけのことでなく、中世・近世に至っても、いわゆる実用の目的以外の旅が、日本人の生活と文学の上にはいつまでも不思議な重要さを持ち続けている。西行とか芭蕉とか、著名な文学者は勿論のこと、もっと名もない旅の遊芸人のような者までが、地方漂泊の旅をかさねながら、その行く先々の地に文芸の種となるべきものを残し、かつまたその旅によって自分たちみずからの文芸の質や量を太らせていったのである。それにもかかわらず、今までの日本文学史は、そうした、いわば名もなき陰の文学者のはたした役割を、ほとんどかえりみないで過ぎてきた。

万葉集、古今集、枕草紙、源氏物語、新古今集など、それぞれの時代、それぞれのジャンルのピークを形成する、都の知識人の手に成る文学も勿論すばらしいけれど、日本の津々浦々の漁民や草深い野山の村びとたちのむくつけき心にも、深いもののあわれの思いを植えつけていった名もなき漂泊者の文芸の功績も、計り知れぬ大きなものがある。日本文化の総和の上から言えば、都びとの文学の果たした役割と、名もなき旅びとの文芸が地方文化の上に果たした役割と、いずれがより貢献度が大きかったかということは、そう簡単に決着のつけがたい問題だと思ふのである。少くともそのくらいのめど

を立ててかからねばならぬほど、日本文学における旅の要素は、重要でありながら、まだはっきりととらえられていない未分明な部分を多く持っているのである。

人間はなぜ旅をするのか。古代日本人の心をひたすらな旅に誘った情熱は、一体、何に根ざしているのだろうか、という疑問が私の心をとらえてやまない。

食料を求めての旅、住むべきよりよい地を求めての旅というような、生きる上の必然にみちびかれての旅が、古代人の生活の中にあるのは当然のことである。だが、そういう必然性にうながされた旅とはかなり性質の違った旅が、日本の古い伝承の中にはしばしば伝えられていて、現代のわれわれの心にも今なお不思議な印象をひびかせてくる。これはどういうことなのだろう。

古代におけるそういう旅にかかわる伝えの一つの典型とも言えるものは、丹後の国の風土記逸文に伝えられた、奈具の社の由来譚である。

むかし、丹後の国の比治の里にある比治山の頂上に、真奈井という泉があって、天女が水浴に降ってくるがあった。山麓に住む老夫婦がそのことを知って、ある日一人の天女の衣を隠してしまった。仲間はみな天へとび帰ったが、ただ一人帰るすべを失った天女はやむなく老夫婦の家に身を寄せることになった。十余年の歳月が流れた。その間に、天女は万病に効くふしぎな酒を作って人々の病いを直し、夫婦の家は富み栄えた。心おごった夫婦は「もともとお前は私たちの子ではない。かりそめに身を寄せただけだから、早く立ち去りなさい」といって追い出してしまった。異郷にあって身を寄せる家を無くした天女は「久しく人間の世に沈んで、天に帰るすべをすら失ってしまった」と

涙を流し、空を仰いで歌った。

天の原ふり放け見れば霞たち家路まどひて行方知らずも

さすらいの旅をつづけていって荒塩の村に至った時、「あの夫婦の無情を思うと心は荒塩のようにさわぎたつ」と言い、哭木なききの村に至って槻の木に寄りかかって声を放って泣いた。後に荒塩の村と言い、哭木の村と呼ぶのは、そのことに由来している。やがて竹野郡の奈具の村に至って「ここに来て、やっと私の心はなぐしくなった（おだやかになった）」と言って、そこで鎮まったと伝える。天女はこの世の命を終ったのである。

これは丹後の国竹野郡にある式内社、奈具の社にまつられる穀物の女神、豊宇賀能売とようかのみの神の鎮座由来譚として伝えられている話で、いわゆる白鳥処女伝説の一変形である。この型の伝えは天女が衣をかくされて人界の男の妻となり、幾人かの子を生みながらなお、時あつてこの世の心のしがらみを断ち切って天界へ帰ってゆくという話が多い。それはそれなりに、夫や子への複雑な思いや愛情を切りすててゆくところに、人の心を悲しがらせたりあわれがらせたりする要素が生じることになる。ところがこの和奈佐の里に下った天の処女は、羽衣をかくされてやむなくその老夫婦の家に身を寄せるだけである。そして人々の病いを癒し家を豊かにしながら、何のむくわれるところもなく悲歎にくれてこの世から転生してゆく。限りなく清い心で多くの人々に無償の恩恵を与えてゆくという点で、多くの白鳥処女伝説の女よりも、かぐや姫などよりも一層典型的な感じを持っている伝えだと思う。自分

1 旅の原型

たちの命の糧である穀物は、そういう女性によってもたらされたものと、古代の人びとは信じたのであった。

自分たちの生活に最も大きな幸福を与えてくれるエネルギー（たま・たましひ）は、遙かに遠い海の彼方、あるいは天空の彼方から、長い長い、そして苦しい旅をつづけてきて、無償の形でそのエネルギーを自分たち一人一人にわかち与えてくれる、聖なる旅人によってもたらされるのだと古代人は考えたのである。

聖なる旅人は、何も女性に限ったことではない。むしろ、男性の形で伝えられているものが多い。だが、男性の形のものとはたとえば天孫ニギの命にかかわる神話のように、宮廷で神話化され、政治的色彩を濃くしたものが主である。男の旅人の伝承では、かなり政治的色彩を帯びているが、ヤマトタケル伝説の中に、純一な古代感情の流露を見ることができるといえる。

「昔、倭武の天皇、丘の上にとどまりたまひて、御膳^{みけつ}を奉りし時、水部^{みづうべ}をして新に井を掘らしめしに、泉きよく香くはしく、飲むにいと好かりしかば、勅^{みことり}してのたまはく「よく渾^たれる水かな」と。是によりて里の名を、いま田余^{たまろ}といふ。」（常陸風土記）

「倭武の天皇、天の下を巡りみそなはして、海の北を征平^{せいへい}たまひき。是にこの国を過ぎ、すなはち槻野の清水にいでましき。水にのぞみてみ手を洗ひ、玉もちて井を榮^{さか}へたまひき。今も行方^{なはた}の里の中に在りて、玉の清水といふ。」（同）

日本書紀では「日本武尊すなはち斧鉞^{よまつ}を受け再拜して……」と記されているところが、古事記には

「(天皇) 比比羅木の八尋矛を給ひき」とあつてずいぶん素朴な形になっている。しかし、常陸風土記を見ると、こんなふうに東国の村々ではヤマトタケルが、杖一本ついて村々をおとずれて来て村人に水を与え食を与えるための数々の奇跡を残して去ってゆく、いわゆる大師さんのもうひとつ古い形をもって伝えられていることがわかる。はるか九州の熊曾建を討ち、出雲に入って出雲建を討ち、帰京したと思うと東国の征定を命じられて「天皇すでに吾に死ねと思ほすか」となげく宮廷神話の中の若きヤマトタケル、更に「吾が足は三重のまがりの如くしていと疲れたり」と訴え、

倭は 国のまほろば たたなづく青垣 山ごもれる 倭しうるはし

命の 全けむ人は たたみこも 平群の山の 熊白禰が葉を 髻華にさせ その子

こんな哀切な「国しのひ歌」を残して、魂を白鳥の姿に化してまでなお旅をつづけなければならなかった若き神の旅の目的が、村々の住民たちの生活の上に、こんなに素朴でつましく、しかも確かな幸福を分ち与えるためにあったのだということを考えてみると、古代の村びとたちの心の中にあっただけ一つのヤマトタケル像、もう一つの旅びととしての姿が、おぼろげながら浮かびあがってくる。

村々の一年の生活が新しく初まる日、一年間の生活を幸福にみちびく初春のエネルギーをもたらすために人間界をおとずれる聖なる旅人を迎えて、蒼々とした海や空を渡ってくる気の遠くなるような長い旅の苦難を、まざまざと自分たちの心の中に実感し追体験するところから、古代人の旅の意識は